

古墳出現期越後における外来系土器

坂井秀弥

1. はじめに

古墳出現期に全国的規模で土器が動くことはよく知られている。西日本における庄内式甕や東日本におけるS字状口縁甕の広汎な分布は、その代表例ともいえる。こうした土器には他地域から直接搬入された土器と、他地域の土器をモデルに在地で製作された土器があるが、両者を含めて「^①外来系土器」と言うことができる。

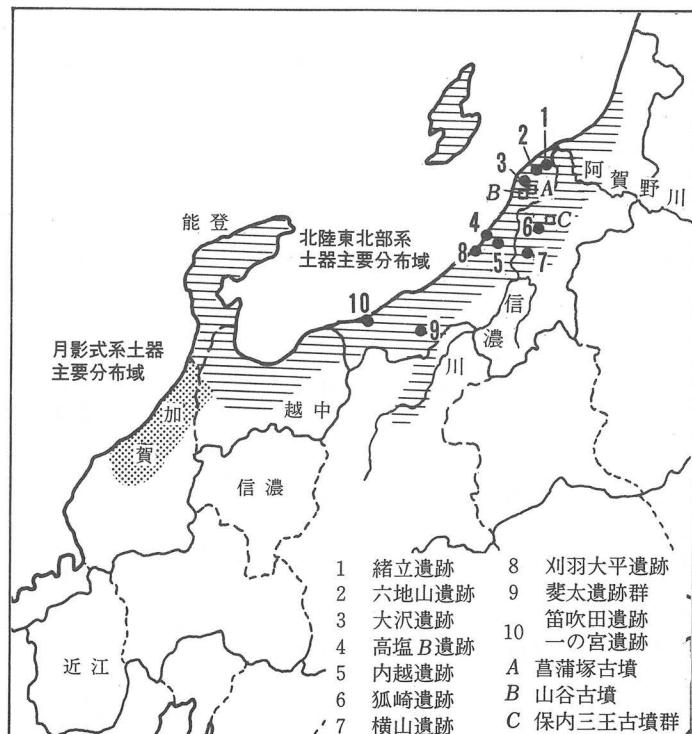
北陸地方の東北端に位置する越後においても、古墳出現期の外来系土器はいくつか知られるようになった(第1図)。

「北陸」と「東北」の地域的な狭間にあって、とかく「辺境」のイメージが強い越後ではあるが、最近、卷町山谷古墳^②(前方後方墳)や三条市保内三王山古墳群^③(前方後円墳1基、前方後方墳1基、その他15基)など、前期古墳の発見が相次ぎ、従来の認識・評価が大きくあらためられつつある。^④越後は日本海沿岸地域における前期古墳の分布域の北限であり、その成立の背景には当然、他地域とのさまざまな交流があったものと思われる。

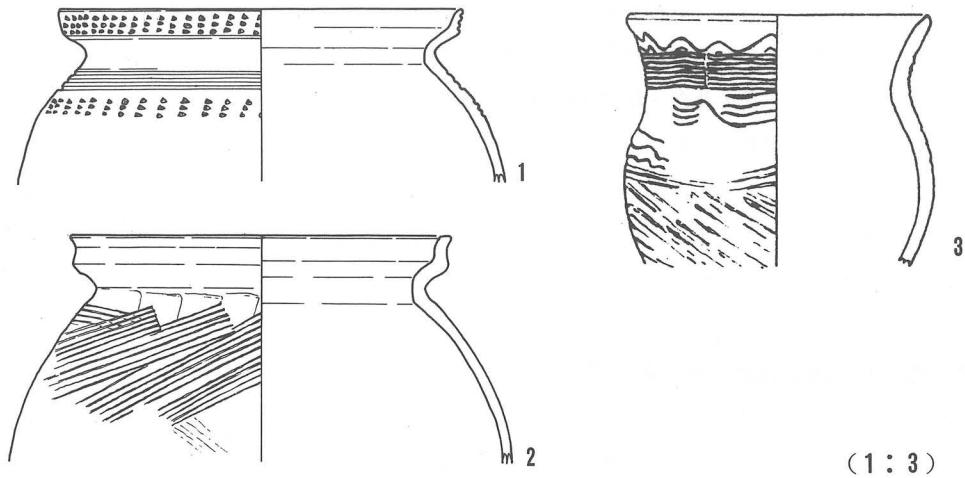
そこで、小稿では越後の外来系土器のいくつかを紹介し、古墳出現期における他地域との関係の一端をさぐることにしたい。なお、「古墳出現期」とはただ単に弥生後期から古墳前期をさすものであって、それ以上の意味はない。

2. 外来系土器

A、卷町大沢遺跡出土土器(第2図)



第1図 外来系土器出土遺跡関係図



第2図 大沢遺跡出土土器

大沢遺跡は新潟平野西側に連なる弥彦・角田山塊北端の尾根上、標高約36mに立地する。平野部との比高は約30mで、広大な新潟平野を望むことができる、いわゆる高地性集落である。昭和54年から57年にかけて新潟大学考古学研究室を主体とする調査が數次にわたって実施され、豊穴住居跡4基、方形周溝墓1基が検出された。^⑤弥生後期後半から月影I式期（谷内尾編年）^⑥にかけての時期を中心とする。

近江系（1・2） 1は方形周溝墓周辺から出土した受口状口縁の甕である。口縁部から体部上半部にかけこの約 $\frac{1}{8}$ を残すもので、口径は16cmである。口縁部は短く外傾しながら直線的にたちあがり、端部は丸くおさまる。口縁帶外面に比較的粗い櫛状工具により、左下りの斜行刺突列点をめぐらし、頸部下位に平行直線文、その下に口縁帶と同じ刺突列点文めぐらす。平行直線文と刺突列点文の原体は同一である。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面は条線が明瞭ではないハケ目（「板ナデ」^⑦）で、体部内面は器面が剥離し、調整不明である。外面にススが付着する淡明褐色を呈し、胎土に小砂粒を含む。焼成はやや軟質である。

2は遺跡の北側から出土した受口状口縁の甕である。口縁部から体部上半部にかけの約 $\frac{1}{6}$ を残すもので、口径15cmである。口縁は短く直立気味にたちあがり、端部は水平な面をもち、わずかに外反する。口縁部は内外面ともヨコナデで、施文はみられない。体部外面はハケ目、内面はわずかなくぼみがあるが、ナデ調整がなされているものと思われる。頸部にはハケ目の前に縦位の板ナデをおこなう。体部外面のハケ目は斜方向で、明瞭に残る。外面にススが付着する。淡褐色を呈し、胎土に小砂粒を含む。焼成は堅緻である。

受口状の口縁形態をもつ甕はこのほかにも、新潟市六地山遺跡（弥生後期前半～中葉）、糸魚川市笛吹田遺跡（法仏II式期）など、いくつかの例がある。^⑧これらをすべて近江系とするにはやや問題があろうが、長岡市横山遺跡（月影I式期）^⑨に、つくりからみて近江系といえるもののが存在する。なお、近江系土器には地域によって施文や器形・手法などにかなりバラエティーがある^⑩というが、北陸的な様相が顕著な「北近江系」^⑪もこれに含めておく。

中部高地系（3） 方形周溝墓周辺から出土した甕で、体部下位が欠失する。頸部から口縁部は

ゆるく弧状に外反し、端部は外傾する面をもつ。体部は肩の張りがない。頸部外面に櫛描の波状状文、その後に簾状文を加え、体部外面も同様の施文ののち、下半部をヘラ削りする。内面はヘラ磨きがなされる。信濃の北部・中部・東部に分布する箱清水式系⁽¹³⁾と考えられる。

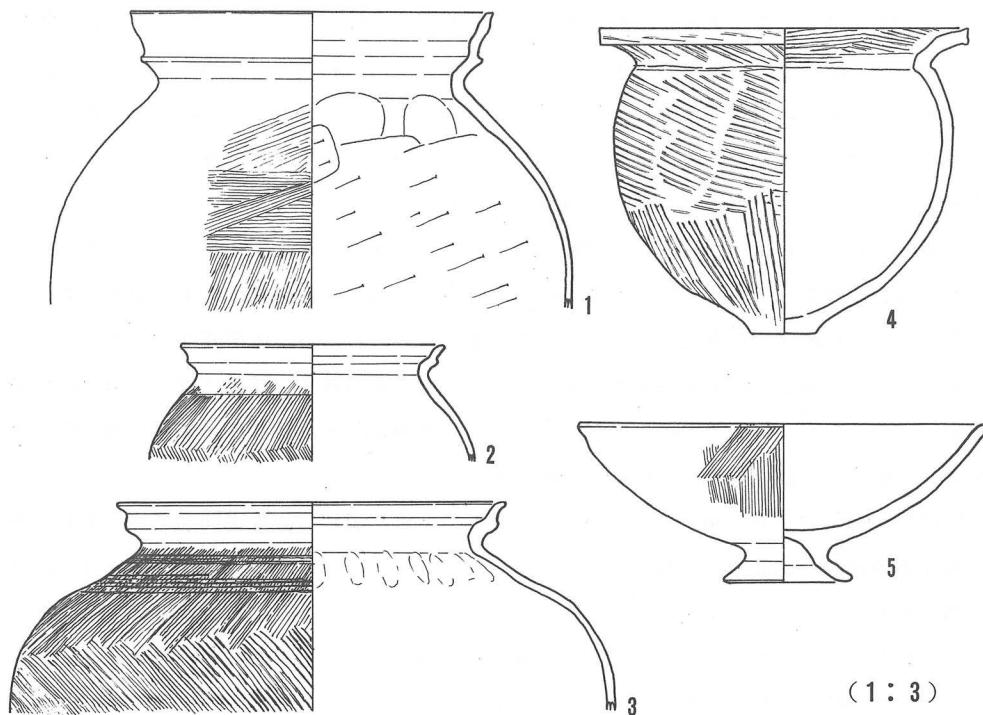
越後のなかでも、信濃川を介して北信濃との交流が活発と推察される越後南東部の魚沼地方においては、弥生中期に中部高地系の土器が主流をなすとみられ、越後のなかでは特異な様相を呈している。後期については資料がほとんどないため、不明ではあるが、中期と同じく中部高地形の土器が卓越するものと予想される。

B、西山町高塩B遺跡出土土器（第3図）

高塩B遺跡は越後中部西側の日本海に面した海岸砂丘上に立地し、背後に低い丘陵をひかえている。現汀線までは約100mの至近距離である。昭和48年に西山町教育委員会が調査した。遺構は検出されなかったが、多量の土器が出土した。⁽¹⁴⁾ 時期は古府クルビ式を中心に、その前後を含むものと思われる。

山陰系（1・5） 1は二重口縁の甕の口縁部から体部上半部で、口径は13.8cmである。口縁帶の下端は明瞭な突出部があり、その内面はくぼんで、上下に稜線をもつ。口縁帶は外反し、端部上方はわずかに面をもつ。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面は細かくて端正なハケ目、内面上端は指頭圧痕、ほかは入念なヘラ削りである。体部の器壁はヘラ削りにより、かなり薄く、全体のつくりはシャープである。明褐色を呈し、胎土は精良である。外面にススが付着する。

5は山陰地方に特徴的ないわゆる低脚杯で、報告書では杯の可能性を考慮しながらも、蓋とし



第3図 高塩B遺跡出土土器

て掲載したものである。全体の約 $\frac{1}{8}$ を残す。杯部は浅く、体部から口縁部はゆるく内湾し、口縁部は丸くおさまる。杯部外面はハケ目、外面下半から脚部はヨコナデで、脚部下端はヘラ磨き、⁽¹⁶⁾杯部内面は粗いヘラ磨きかと思われる。1・5ともに出雲地方の編年Ⅳ期・V期に比定されよう。

加賀を中心とした北陸地方西部においては、弥生後期に土器様相が全般的に山陰と濃密な関連をもつようになり、⁽¹⁷⁾北陸地方東北部もその影響を受けるものと推察される。越後においても後期後半の法仏Ⅱ式期の西山町内越遺跡などで、二重口縁に擬凹線を施した甕（第4図1）や器台が⁽¹⁸⁾出土している。また山陰からもたらされ、北陸地方に広く分布するS字や鋸歯文のスタンプ施文も、前記の大沢遺跡、三条市狐崎遺跡、糸魚川市一の宮遺跡で出土している。この時期以降のものになると、高塩B遺跡出土例以外では、横山遺跡にこれと類似した甕がみられる程度である。なお、高塩B遺跡で注口と脚台をもった土器が出土しており、山陰の注口土器との関連も考えられるが、器形は山陰地方に類例をみないようである。

東海西部系（2・3） 2・3ともにS字状口縁の甕である。2は口径10cmの小形甕で、口縁部から体部上半の約 $\frac{1}{2}$ を残す。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はハケ目、内面はナデである。淡黄褐色を呈し、胎土は精良である。

3は口径14.8cmの大形甕である。口縁部は短く外反し、端部は丸くおさまる。頸部から口縁帶下辺にかけては器壁が厚くなる。体部上半はやや肩が張る形態をとる。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はハケ目のうちに、体部上端に上下2段の横方向の条線を加える。体部内面上端は指頭圧痕、ほかはていねいなナデである。体部の器壁はうすい。淡褐色を呈し、胎土は精良である。2・3ともに外面にススが付着する。いずれも体部下半部を欠失するが、有台と考えられる。3⁽²³⁾は安達・木下分類の「ⅢA類」にあたると考えられる。

東海西部に出自をもっとされるいわゆるS字状口縁甕は現在のところ、上記2点のほかに新井市斐太遺跡群（法仏Ⅱ式～月影Ⅱ式古段階）に有台の完形品1点がある。この甕の口縁帶下辺には斜行列点文がめぐっている。甕以甕では、欠山式・元屋敷式系統の高杯が、大沢遺跡、柏崎市刈羽大平遺跡、黒崎町緒立遺跡で出土している。パレススタイル壺の典型例は狐崎遺跡にあり、その影響が感じられるものが緒立遺跡にある。

畿内系（4） 一見タタキ目に似たハケ目調整（「擬タタキ」）の甕で、畿内系というには不適当かもしれないが、それを模していると考えられる。口径14cm、器高11.7cm、全体の約 $\frac{1}{2}$ を残す。口縁部はくの字状に大きく外反し、端部は面をもつ。体部高に対して胴径が大きな形態で、球形にちかい。底部は小さな平底である。口縁部内面は横方向のハケ目、外面は口縁部、体部ともハケ目、体部内面はナデである。体部外面のハケ目は上半部と下半部でことなっており、他のハケ目調整の甕と明瞭なちがいをもつ。上半部のハケ目は粗くて太い条線の原体で、水平よりやや斜め方向に、上下に連続させて、縦割りに施し、下半部のハケ目はそのうちに上から下に縦方向に施すものである。器形も球体にちかい体部、大きくくの字状に外反する口縁部など、他の甕との相違点が指摘される。このようなことから、この甕は畿内のタタキ調整の甕を模して製作されたと考えられる。褐色を呈し、2～3mm大の砂粒を多く含む。外面にススが付着する。

^(補註2) 越後では現在のところ、タタキ調整の甕は確認されておらず、北陸地方においては、越中小杉

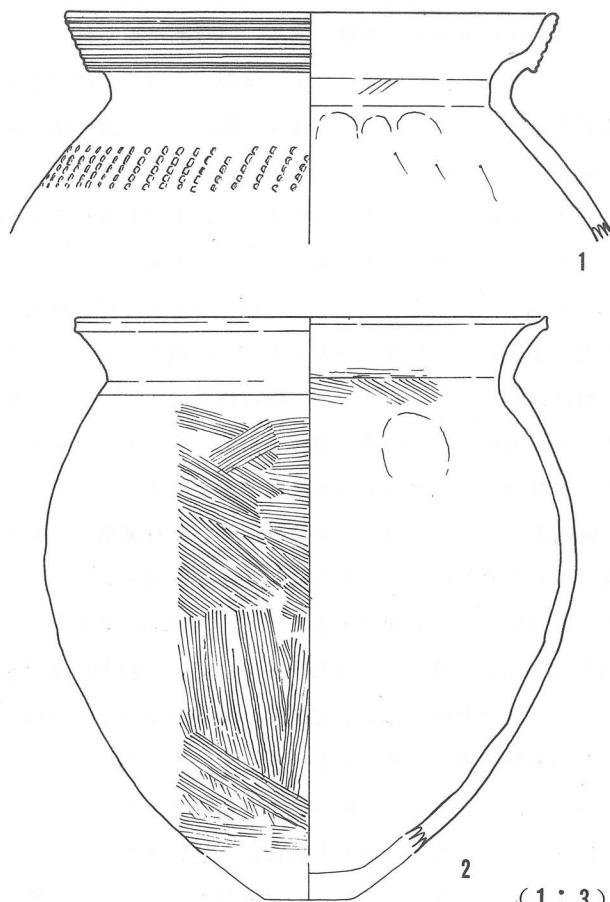
²⁸⁾ 流通業務団地内No.21遺跡が東限となっている。加賀ではかなりの出土例が知られており、²⁹⁾ 越中以東のあり方とことなっているようである。

3. 在地の土器をめぐって

以上、近年の報告例のなかから、大沢遺跡と高塩B遺跡の近江系、中部高地系、山陰系、東海西部系、畿内系の土器を紹介し、あわせて越後の外来系土器についてごく簡略に概観した。これらのうち、どれだけ搬入品かどうかは決定しがたい面もあるが、在地で製作されたと考えられるのは、タタキ調整ではない畿内系の高塩B遺跡例、大沢遺跡の近江系土器（1）である。これ以外のものについては、胎土・製作技法などは彼地のものとあまり差がないのではないかと思われ、搬入された可能性も考慮される。

外来系土器の時期については、在地の詳細な土器編年を含めて、いまは論ずる用意はないが、大沢遺跡出土土器は谷内庄編年月影I式期、高塩B遺跡出土土器は月影II式新段階から古府クルビ式期に、それぞれおおよそ比定されよう。

ところで、越後の在地の土器であるが、基本的に能登・越中・佐渡を含めた北陸東北部の土器と共にしている。³⁰⁾ 当期の北陸地方の土器としては、二重口縁に擬凹線を施した「月影式甕」系統の土器がよく知られている。このタイプの土器は弥生後期の法仏I式期には、成立しており、その背景には山陰の影響を受けていることは明らかであるが、このタイプが主体をなすのは、加賀を中心とする地域であり、能登・越中以東には少ない。越後では内越遺跡に法仏II式期の例（第4図1）があるが、量的にはごく少ない。これに対して、北陸東北部の甕はくの字状に外反した単純な口縁で、端部がヨコナデによって面をもつものである（第4図2）。調整技法上では、体部内面のヘラ削りが顕著ではなく、月影式系統の甕と対照的である。布留式の段階になると、加賀以西では在地系の月影式甕にかわって、畿内系の布留

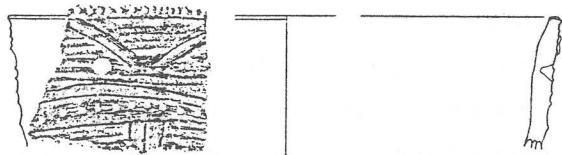


第4図 内越遺跡出土土器(1)と高塩B遺跡出土土器(2)

式甕が成立するが、北陸東北部では布留式甕はほとんど入ってはいない。

このように能登・越中・越後・佐渡を含む北陸東北部は、かなり広範囲にわたって同一の土器文化圏をもつとともに、加賀以西の地域と明確に一線を画していたことが知られる。北陸東北部地域における中枢は、古墳のあり方からみて能登と考えられ、この地域内の交流は日本海を媒介とした海上ルートによるものと想定される。ひるがえって言えば、海上ルートを媒介としたがゆえに、東西に広い地域圏が成立したといえよう。したがって、ここでとりあげた山陰系土器など、かなり遠い地域の土器が存在することも、同じ日本海沿岸地域にあるからこそであろう。^①

内越遺跡で出土した縦縞文土器（第5図）は、現在のところ分布の南限資料であるが、これも海上ルートでもたらされたとみてよいであろう。^②



第5図 内越遺跡出土土器 (1:3)

4. おわりに

まだまだ古墳出現期の調査例は、他地域ほど多くはない状況であるが、いくつかの地域の外来系土器が出土して

いることが確認された。これら外来系土器をめぐる多くの問題については全く言及できなかったが、越後においても多くの地域とさまざまなかたちでの交流があったことだけはうかがうことができる。言うまでもないことではあるが、越後もけっして閉鎖的な地域でなく、新しい社会的・政治的な流れのなかにあったのである。今後も新しい発見が続くであろうし、調査例も増加すると思われる。具体的な古墳出現期越後の様相については将来にゆだねたい。

(1986.6.30)

<註>

- ① 岩崎卓也「古墳出現期の一考察」（『中部高地の考古学III』 長野県考古学会 1984）
- ② 甘粕健・小野昭ほか『山谷古墳』（卷町教育委員会 1984）
- ③ 甘粕健・小野昭ほか『保内三王山古墳群測量調査報告書』（三条市教育委員会 1985）
- ④ 甘粕健「前方後円墳の分布と越後における古墳発生に関する予察」（『越佐の歴史と文化』 宮栄二先生古希記念刊行会 1985）
坂井秀弥「古墳出現期の新潟県」（『第5回三県シンポジウム 古墳出現期の地域性』 千曲川水系古代文化研究所ほか 1984）
- ⑤ 甘粕健ほか『大沢遺跡』（卷町・潟東村教育委員会 1981）
小野昭ほか『大沢遺跡II』（新潟大学考古学研究室 1982）
- ⑥ 谷内尾晋司「北加賀における古墳出現期の土器について」（『北陸の考古学』 石川考古学研究会 1983）
以下、小稿における「法仏I式」・「法仏II式」・「月影I式」・「月影II式」・「古府クルビ式」はこれによる。越後における弥生後期から古墳前期の土器編年の概略は、坂井秀弥は

か「内越遺跡出土土器の越後における編年的位置」（『国道116号線埋蔵文化財発掘調査報告書 内越遺跡』 新潟県教育委員会 1983）、坂井秀弥「越後の弥生後期についての覚書」（『新潟県史研究』 17 新潟県 1985）に示したが、なお多くの検討課題があり、今後に期したい。

- ⑦ 石野博信・関川尚功『纏向』（奈良県立橿原考古学研究所 1976）
- ⑧ 寺村光晴「越後六地山遺跡」（『上代文化』 30 国学院大学考古学会 1956）
坂井註⑥文献
- ⑨ 寺村光晴・千家和比古ほか『笛吹田遺跡』（糸魚川市教育委員会 1978）
- ⑩ 中村孝三郎『先史時代と長岡の遺跡』（長岡市立博物館 1966）
坂井註⑥文献
- ⑪ 中西常雄「近江における斐形土器の動向」（『考古学研究』 125 考古学研究会 1985）
用田政晴「近江における弥生時代後葉の土器群」（『県営かんがい排水事業関連遺跡発掘調査報告書 II - 3』 滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 1985）
- ⑫ 用田⑪文献
- ⑬ 笹沢浩「中部高地」（『弥生土器II』 ニュー・サイエンス社 1985）
- ⑭ 戸根与八郎ほか『関越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 長表遺跡』（新潟県教育委員会 1986）
- ⑮ 金子拓男・坂井秀弥『新潟県刈羽郡西山町高塩B遺跡発掘調査報告書』（西山町教育委員会 1983）
- ⑯ 赤沢秀則「出雲地方古墳出現前後の土器編年試案」（『松江考古』 6 松江考古学談話会 1985）
- ⑰ 谷内尾註⑥文献
- ⑱ 坂井ほか註⑥文献
- ⑲ 谷内尾晋司「内浦町の集落遺跡と古墳」（『内浦町史』 1981）
- ⑳ 金子拓男「狐崎遺跡」（『三条市史』 資料編第1巻 1981）
- ㉑ 土田孝雄『糸魚川市史』 資料集 I 考古編（1986）
- ㉒ 田中靖「東山丘陵西麓採集の弥生時代及び古墳時代の遺物」（『三条考古学研究会機関誌』 3 三条考古学研究会 1985）
- ㉓ 安達厚三・木下正史「飛鳥地域出土の古式土師器」（『考古学雑誌』 50-2 日本考古学会 1974）
- ㉔ 駒井和愛・吉田章一郎『斐太』（慶友社 1962）
坂井註⑥文献
- ㉕ 品田高志ほか『刈羽大平・小丸山』（柏崎市教育委員会 1985）
- ㉖ 磐崎正彦編『緒立遺跡第2次』（黒埼町教育委員会 1979）
- ㉗ 谷内尾註⑥文献
- ㉘ 上野章ほか『小杉流通業務団地内遺跡群第7次緊急発掘調査概要』（富山県教育委員会

1985)

- ②9 宮本哲郎「弥生時代から古墳時代にかけての土器移動」（『金沢市南新保三枚田遺跡』 金沢市・金沢市教育委員会 1984）

⑩ 坂井ほか・坂井註⑥文献

越後のなかでも、信濃川の河口付近より北側のいをゆる阿賀北地域は、弥生中期から後期前葉～中葉に、南東北系土器が多く分布しており、越後中・南西部とはことなったあり方をみせる。これ以降の状況は資料も少なく不明であるが、古府クルビ期に比定される豊浦町曾根遺跡（家田順一郎ほか『曾根遺跡Ⅰ』・『同Ⅱ』 豊浦町教育委員会 1981・1982）では南東北系の土器はみられない。

現在のところ、この地域には前期古墳の存在は知られておらず、大局的にみて、この付近が日本海沿岸地域における東と西の接点とすることはできよう。

⑪ 坂井註⑥文献

甘粕氏は「能登の政治勢力を始祖に擬する同族的な結合が設定された」とする（註④文献）。

⑫ 坂井ほか註⑥文献

補註1 加納俊介氏の御教示によれば、3の甕は赤塚分類（赤塚次郎「S字甕覚書85」『愛知県埋蔵文化財センター年報 昭和60年度』 1986）B類であり、搬入品の可能性が高いといふ。

補註2 長岡市横山遺跡の昭和60年・61年の調査でタタキ調整の甕が検出された（駒形敏朗ほか「横山遺跡試掘調査概報」『長岡市立科学博物館研究報告』21 1986）。

補註3 月影式甕は越前においても主要なタイプであるといふ（田嶋明人「古墳出現期の土器群と月影式土器」『シンポジウム月影式土器について』 報告編 石川考古学研究会 1986）。

[1987.1.20]

(追記)

小稿の土器実測図のうち、大沢遺跡出土の近江系土器（第2図1・2）は新潟大学考古学研究室の甘粕健氏の御快諾を得て、筆者が実測したもので、ほかは各報告の原図によった。ただし、高塙B遺跡出土土器については実測図をもとに再トレースした。

ここでとりあげた土器については、金子拓男・兼康保明・用田政晴・田嶋明人・北野博司・平野芳英の諸氏から、貴重な御教示をえた。記して謝したい。